

# 韓国現代文学の指標

瀧澤 秀樹

- I. 文学の現代性と社会の現代性
- II. 文学の〈時代区分〉に関する方法的諸問題
- III. 『韓国現代代表小説選』に見る文学の「現代性」
- IV. 『韓国現代代表小説選』に収録された作家と作品の時代性
- V. 近代文学の継承性と文学の「現代性」

キーワード：文学の現代性・韓国現代代表小説選・韓国現代史・申采浩・李光洙・金学鉄

## I. 文学の現代性と社会の現代性

「現代」という概念を時代区分に使用するとき、常に生じる多少厄介な問題は、「現代」が刻々と進行する時間としての「現在」に規定されざるを得ないという当然の事情に起因すると考えられる。例えば「古代から中世への移行」とか「近代社会の形成」とか言う場合には、「古代」「中世」「近代」の時代区分に関して、それぞれ「古代」「中世」「近代」の概念規定に即して、客観的な基準を設定して論じることが出来る。

勿論、その客観的基準とは決して絶対的なものではなく、時代区分の目的と認識主体の方法論の如何によって多様であり得るし、時代区分

の対象によっても異なり得ることは、言うまでもない。当然、同一の主体の同一の対象にかかわる時代区分であっても、環境或いは方法論の変化によって、基準自体が可変的であることも、論議の前提である。

例えば、〈社会構成体〉の移行にかかわる時代区分の問題に関連して言えば、「現存社会主義の崩壊」以後も、従来と同様の「封建制から資本主義への移行」が論議され、移行の基準としての「産業資本の確立」を論じることが出来るか否か自体が問題になる筈である。インプリシットにではあれ、「封建制から資本主義への移行」論議は「資本主義から社会主義への移行」の前提条件の解明という課題を前提として成り立っていた面があったからである。

しかし、このことが「中世的世界の形成」にかかわる時代区分論にどの程度直接関連するかは、それ自体別の次元の問題であり得る。それは「中世」についての認識主体の問題意識と、〈社会構成体〉の方法論に規定された、様々な立場を可能にするであろう。

或いはまた、「近代資本主義社会の形成」と言う時の「近代」と、「近代文学の成立」と言う時の「近代」は、異なった基準をもとに規定することが出来るし、むしろ基準の異なることこそが、ここでは基準の持つ客観性を保障するであろう。「近代建築」「近代音楽」等々につい

でも同様である。

ここで確認しておきたいのは議論の前提となる以上の点ではなく、「現代」の場合には、これとはまた次元を異にする困難さがあるということについてである。

試みに、高度経済成長期以降に限定して、「日本（或いは世界、またはアジア）経済の現状」をテーマにした書物や文献を検索すれば、その殆ど全ての時点で、「転換期に立つ日本（或いは世界、またはアジア）経済」が語られ続けて来たことを容易に確認出来るであろう。ここで「経済」は適宜「社会」や「政治」や「教育」に置き換えることも可能であろうし、「文学」や「芸術」とすることも出来る。

つまり、我々の認識において「現在」は常に「変化の過程の一時点としての現在」であり、同時にしばしば「質的变化への転換点」であるわけであろう。

時が経過すれば、〈真の質的变化〉は実は別の時点スタートラインとしていたことが明らかになることがよくあるし、むしろその方が普通であろう。ソ連社会主義にルーベルマン方式が導入された頃に論議された「転換点のソ連社会主義」よりも、ゴルバチョフの登場とペレストロイカの開始は遥かに巨大な「転換点」をなしたであろうし、しかもその時でさえ、我々の認識はそれがやがて「ソ連の崩壊」に及ぶかも知れないというところには及んでいなかったのである。

このことは、「現在」が「現代」において位置づけられる基準は、多くの場合一定の時間を経過した事後に明らかになるという事実を示している。困難なことは、それにもかかわらず「現代」が事前に一定の内容を持つ基準として提示されていなくては、「現在」の意味を論ずることがおよそ不可能であるという関係に由来

する。

このような抽象的論議が、「文学の現代性」を論じるという本稿の課題にとって如何なる意味を持つのかという、疑問を持たれるかも知れない。今の筆者にとって避けて通れないこの点について、多少具体的な論点を提示しながら論旨を展開しておこう。（敢えて繰り返せば、この論議は政治・経済や社会の各分野に共通すると考えている。）

「経済」や「政治」、「文学」などという文化領域によって、「近代」や「現代」にかかわる時代区分の基準は異なるということが、全ての議論の前提である。日本帝国主義の植民地支配のもとにあった朝鮮社会は、社会構成としては近代を達成することの出来ない状態の「植民地半封建社会」であったとしても（「植民地半封建」〈社会構成体〉または〈社会性格〉論をめぐる論争にここで論及するのではない。議論を進めるうえでの「仮に」という前提に過ぎない）、そこでは近代文学や近代思想が成立し得たし、近代的ナショナリズムを指向する民衆運動が展開し得たと考えるのは、当然である。

誤解を避けるために予め確認しておけば、この場合も、「社会構成と文学においては近代の基準も別箇のものである」として、両者の相互規定性を無視したうえで「社会は社会、文学は文学」という平板な並列的認識を以って良しとするのではない。前近代的社会構成体のもとで近代文学が成立したと考えようとすれば、両者における「近代」の基準を厳密に峻別しつつも、その相互規定関係に慎重な考察を必要とするであろう。そのことを指摘したうえで、その点はここでの主要な論点ではないため、これ以上の言及は避ける。

ともあれ、韓国の「現代社会」が何時形成さ

れたか、換言すれば、「韓国現代史」のスタートしたのは何時であったかという問題を提起すれば、「現代社会」の基準を明確にしたうえでの、政治・経済等の分野の歴史的諸事実の総合的検討が必要になる。そして既に述べた様に、ここでは何よりもまず「現在」が「現代」において占める位置が、考察の対象になるであろう。逆に「現在」が「現代」の基準に与える規定性も、ここで問われることになる。時間の経過によって「現在」が過去となる時点では、その規定性が直ちに変化し、基準としての意味内容を変えたり失ったりする蓋然性を内包しつつ、である。

このような認識を前提として、「文学の近代性」「文学の現代性」が「韓国現代史」にかかわる論点に接近して行きたい。

「現代史」の始点を何処に求めるかということは、社会構成体にかかわる論点ではない。従って、「韓国現代社会」という場合も韓国の社会構成が〈現代的〉になって以後の社会という意味ではない。そもそも「現代」が社会構成に（直接）かかわる概念ではないからである。その意味では、「近代」が資本主義的社会構成体の確立という基準と直接関連して規定されることのある〈近代的国民経済〉の形成ないし成立を含意する場合があるのとは、大きな相違点を持っている。（日本の場合、太閤検地以後の独特の「近世封建制」が社会科学の概念として成立し、その「上部構造」としての「幕藩体制社会」の概念も広く承認されているから、「近世」もやはり社会構成と関連して規定され、場合によっては逆にその基準となる時代区分の概念である。「中世」についても、石母田正から網野善彦に至るその歴史像の変化にもかかわらず、社会構成の規定性と関連づけられた時代区分で

あるという限りでは、ほぼ同様の位置を占めて来たと言える。）例えば「現代資本主義」と言う場合、それは「資本主義の現代的（現在から時間的に近い過去から今に至る時期の）特徴的なあり方」の意味であって、固有の社会構成体を基準としてそれとの関連において時代区分の概念となる「現代」に規定されたり、逆にその基準として設定されているわけではない。以上から明らかなことは、「現代」は「近代」に連続する（或いは「近代」に包含されつつその比較的「現在」に近い）時代として観念されているにもかかわらず、少なくとも社会科学的認識における「現代」は、時代区分上の概念として「古代」「中世」「近代」とは区別される固有の性格を持つということである。

ここ迄の論議は、本稿が考察しようとする韓国現代史と韓国現代文学の関連と両者の間の「現代性」の乖離という問題に直接かかわっている。

既に別稿で部分的に閑説したことがあるが（拙稿「韓国現代文学の現住所」大阪経済法科大学アジア研究所『東アジア研究』18号。なお滝沢秀樹・鄭敬謨・隅谷三喜男『韓国現代史をどう見るか』、「朝鮮問題」懇話会、1994年、における筆者の発言を参照）、〈北〉との関数関係から切断されたものとしての、換言すれば政治・軍事的対立の次元を越えて〈分断〉が民衆の生活意識を含む社会の隅々に浸透し、社会関係を根本的に規定するようになった今日の韓国社会は、1960年の「四月革命」に続く翌1961年の「五月軍事クーデター」を起点として成立したと、筆者は考えている。それに関連した文学の世界での出来事は、「四月革命の空間」で発表された崔仁勲の『広場』の登場であった。「分断体制固着」の直前に「分断克服文学の嚆矢」が見られたことは、いかにも意味深長な出

来事であったと言える。

これに対し、韓国社会の「近代」については、近代的民族運動の展開を基準にして（「開化派」の流れに位置づけられる都市知識人・初期ブルジョアジーの運動〔その頂点は「独立協会・万民共同会」運動〕と、民衆自身の直接行動〔その頂点は東学革命とも呼ばれる甲午農民戦争と抗日義兵闘争〕）、その総結集としての1919年の「三一独立運動」を起点として設定しようとする見解に強い魅力を感じながらも、日本帝国主義の植民地支配のもとにあった朝鮮社会の（社会構成体としてではなく）〈基本的性格〉を「植民地・半封建社会」と規定出来るとすれば（既に述べたがこの規定にかかわる論争については本稿では言及しない）、その性格を根本的に規定した植民地支配自体の終焉、より具体的には総督府権力が解体した1945年の「解放」以後を、「近代」と規定する立場を採りたい。様々な文化諸領域において独自の基準で「近代」が規定され得ることを前提に、である。

この場合、さきの「現代」との関連については取り敢えず次の様を考えておきたい。「近代」の基準の可変性については、以上の論旨の展開の過程で明らかにして来た通りであるが、その可変性は「現代」に関する規定の可変性とは次元を異にしている。仮に現在以後の韓国における政治社会の変動が、かつての反共軍事体制の残滓を清算し切って新しい〈市民社会〉を社会の構成原理として定着させる段階に到達するならば、或いは更に分断を克服して（形態とそこに至る過程はともあれ）統一された国民国家の形成を達成するならば、「現代」の始点は当然変化することになるだろう。勿論それは今から見た未来のある時点になるとは限らない。1980年の「ソウルの春」、1987年の「六月民衆抗争」（又は「6.29宣言」）、1993年の「文民政権発足」

などが、或いはまた1972年の「南北共同声明」、1991年の「南北合意書」などが、「現代」の始点として画期となるかも知れない。それがどう規定されるかは、すぐれて上記の変革や統一の内容にかかっている。

しかしこの様な「可能性としての〈現代〉の基準の変化」が現実化しても、そのことによって直ちに上述の「近代」の基準が影響を受けるわけではない。従って、「現代」は「近代」に包摂され、その一部を占める下位概念であると考えるのが、両者の関係を整合的に理解することを可能にするであろう。

「近代」と「現代」のこの関係は、「韓国社会」や「韓国現代史」に限定しないで、文学を含む様々な文化諸領域において妥当すると考えたい。勿論“如何なる場合にも必ず”妥当すると固定的に考える必要は、必ずしもない。例えば「近代音楽」と区別される「現代音楽」は、独自の固有の基準を持つものなのかも知れない。しかし、少なくとも本稿で考察する文学の領域においては、上述の命題が妥当するものと考ええる。他ならぬ韓国における「現代文学」にかかわる認識が、そのようになっていると思われるからである。

もっとも筆者は、韓国における「現代文学」が一般に韓国の文学界においてどの様な規定性を持つものとして認識されているかについて、責任のある発言を出来る立場にはない。韓国文学に関する筆者の知識は、「現代韓国社会」を研究対象とする者の一人として、文学作品を社会変動の動態を知るための〈資料〉として利用するという動機で多少読んで来た過程で得た、断片的なものであり、固有の価値を持つ文化領域としての文学それ自体を対象とした研究の経験を持つ者ではないからである。

本稿では1996年に創作と批評社から刊行され

た『韓国現代代表小説選』（全9巻、原題ハングル）を検討の素材として、韓国における「文学の現代性」について、考えてみたい。

しかし、その具体的作業に入る前に論じておくべき点が、まだ残っている。

## II. 文学の〈時代区分〉に関する 方法的諸問題

韓国の「現代文学」について考察しようとする場合、予め次の諸点について確認しておくべきである。

第一に、韓国は帝国主義の植民地支配から（結果的に「分断国家」の一方という特殊な形態になったとは言え）〈解放〉されて成立した新興国家としては、第二次世界大戦後の「第三世界」の一員であったし、日本帝国主義から民族の独立を目指して闘われた抗日闘争の理念となった韓国（朝鮮）民族主義は、（共産主義の理念を纏った流れ、従って解放後に〈北〉の政治的支配権を掌握するに至るグループのそれを含めて）、第二次世界大戦から戦後の時期にかけて帝国主義の植民地支配や新植民地主義に抵抗して広汎に展開した、A. A. L A地域のナショナリズムの一環であったということである。

第二に、それと同時に、A. A. L A地域に成立した他の大部分の新興国家とは異なり、韓国（朝鮮）は、中国を中心とした「冊封体制」という前近代の東アジアに特有の国際関係のもとで、一つの国家として非常に長い固有の歴史を有しており、前近代において既に「民族形成史」が相当のレベルに達していたということである。前近代の国家が、大枠においてその支配領域や構成員を近代国家に継承させた例は、非ヨーロッパ世界においては日本と朝鮮など東アジアに極く少数存在するに過ぎないことに注意

しておきたい。

この第二の点は、「韓国文学の現代性」を考える場合にも、特に留意しておくべき事柄である。「民族形成」における（少なくとも一つの重要な）メルクマールが民族固有の言語の存在であるとすれば、古代国家の段階で既に〈朝鮮語〉を持ち、15世紀中葉以来民族語を表記する固有の文字〈ハングル〉を使用して来たという事実、特に民衆を対象とした〈ハングル文学〉の伝統を考えなかったならば、日本帝国主義の民族抹殺政策のもとで遂に朝鮮語文学を護り通した事実を説明することは困難であろう。A. A. L Aに属する多くの地域において、「支配民族の言語と文字を使用した被支配民族の抵抗文学」が書かれて来たことと対比すれば、ある意味においてこれは驚くべき事実であろう。

韓国社会一般の性格規定と一旦区別して、韓国における「文学の近代性」を、仮に〈帝国主義の支配に抵抗する近代的ナショナリズムの文学的表現の成立〉を基準に規定出来るとすれば、植民地支配の初期に登場する申采浩の文学などがその嚆矢として位置付けられることになるであろう。ここで「近代的ナショナリズム」とは、近代的国民国家（民族国家）の形成を指向する性格を持つナショナリズムという意味であり、従って李朝末期の「資本主義の萌芽」云々の論点とも接点を持つ概念である。筆者はこの点に関しては、当時の内部成長的なブルジョア的發展の存在を積極的に評価する見解を持っているが（拙稿『『内在的發展』と“内在的視角”』、拙著『歴史としての国民経済』御茶の水書房、1996年、所収）、「第三世界のナショナリズム」の一翼としての韓国民族主義との関連をより重視すれば、この論点は副次的意義を持つに過ぎないことになる。両者の観点の整合の可否もまた、「文学の近代性」にかかわる論点になるが、

本稿ではこれ以上の言及は控えよう。

但し、上述の「文学の近代性」はその当時の文学が指向した内容によって規定されるものになる点で、社会構成や社会の性格の規定と共通性を持つことに留意する必要がある。およそ「時代区分」の論議に必然的に随伴する問題であるが、「時代区分」がある特定の時代について絶対的な〈時間の経過〉を基準に行われる以上、或る時代の事柄の全てが或る共通の性格を持つことになる保証はどこにもない。むしろ、「近代日本」の社会構成が、それ自体としては前近代的な生産様式としての〈半封建的土地所有〉を伴っていた（それどころかそれを「基柢」として成り立っていた）という「講座派」的な考えは、論理それ自体の成立可能性を否定されるべきではないし、前近代的な人間関係の原理を提供した日本的〈家〉制度が、明治以後の日本社会の性格を根底的に規定していたという考え（川島武宣『日本社会の家族的構成』）は、日本の「近代社会」をある厚みを持ったものとして立体的に把握するのに、有効な視点を提供して来たと言えるであろう。

このことは、「時代区分」にかかわる別の難点の存在を示唆する。「無限に多様な内容」を持つある時代を、特定の視角を基準に性格付けしようとするれば、その基準となる性格と異質の内容を持つ事柄をもそれと同一の時代区分で括ってしまう結果になるし、「時代の性格」にかかわる論議においてはこのことは絶対に避けられないことだからである。申采浩と“同時代人”であった李光洙の文学は、彼が「親日派」に転落する遙か以前の初期の作品から、日本語的表現による欧米文化への憧憬を語っていたと筆者は見ているが（三一独立運動以前の1917年に発表された長編『無情』に、既にその傾向を明瞭に見て取ることが出来る）、韓国文学の「近代

性」を、第三世界的ナショナリズムへの継承性を持つ韓国民族主義の流れとの接点の成立として理解するという前述の本稿の立場においても、だからと言って李光洙文学を近代文学の範疇から排除することは穏当ではない。しかも当時の朝鮮社会で多くの読者に歓迎されたのは、疑いなく、申采浩ではなくて李光洙であった。

文学における時代区分が、（例えば）「産業資本の確立」の場合の様に支配的生産様式にかかわる〈定量的〉把握に関連づけられて行われるものではないし、（例えば）日本における「近世封建制の成立」の場合の様に階級関係や国家形態の転換という客観的基準を持つものではない以上、時代区分について考察する主体の問題意識を基礎にした時代認識の如何が、ここでは決定的な意味を持つ。本稿とは別の立場で、「市民社会」の原理への認識や追求を欠如した）欧米近代文化指向の文学の成立を、文学における「近代性」の指標とすれば、李光洙こそが「近代文学」の担い手（もしくは先駆者）となるであろうし、「ハングルで口語体を用いて書かれた朝鮮語文学の支配的地位の成立」を基準にすれば、別の代表的人物が挙げられることになる。そもそも文学においては（「生産様式」やウクラードとは異なり）、特定のイデオロギーが権力的に強要されることがない限り、多様な性格の作品の同時存在がむしろ通常のあり方であり、とりわけ韓国の「開化期」から植民地時代初期にかけての時期の様な歴史の転換点においては、思想や文学においては〈百家争鳴〉情況が展開するのが自然であろう（手近な書物として、「修学能力試験対備」の学習書として刊行されている、『韓国の永遠の開化期小説』クルボツ社〔ソウル〕、1994年、に収録されている数編の作品の多様さが、よい例である）。この場合、そもそも時代区分という思考方法自体

を放棄しない限り、認識主体の問題意識による時代区分を前提としつつ、その時代区分は同時代の異質の文学作品にも適用される、包括的意味を持つものとしなければならない。

以上が、韓国文学の「現代性」に関する具体的考察に入る為に、確認しておきたい論点であった。

### Ⅲ.『韓国現代代表小説選』に見る文学の「現代性」

本稿のテーマを設定して「韓国現代文学」とは何かについて考察してみたいと思った直接の動機は、1996年に創作と批評社〔ソウル〕から刊行された『韓国現代代表小説選』（全9巻）に接し、そこで韓国文学の「現代性」について基準とされているところを知ったことにある。その『韓国現代代表小説選』（以下、『小説選』と略記する）の編集にあたって、特に「文学の現代性」の規定が厳密に行われたわけではないようではあるが、その編者の一人である林煥澤氏が「刊行辞」（各巻共通）で次の様に述べていることに、注意しておきたい。

「……文学界においてはそもそも‘西洋化’に該当する様な概念すらなかったのである。内在的な古典小説の基盤に外来的な要素として西欧の小説を受け入れながら誕生したのが、われわれの近代小説である。この近代小説は、民族文学としての資質を拡充しながら、豊かにかつ澁刺と成長した。……『韓国現代代表小説選』は、すなわち20世紀の韓国小説の豊富ですぐれた収穫物を総整理しようとする企画である。長編小説はやむをえず除外して、短編小説中心となった。……われわれの場合、小説文学の真髄は短編小説にあったのである。……大体においてわれわれの短編文学は1920年代に成立、1930

年代に完成するが、それ以後も今日までその枠組のうえでそれぞれ多彩で華やかに花を咲かせたと考えている。……当時の短編小説は意外に速く高い水準に到達することができたのであったが、それはその直前に、形式的にそこに近いところまで至っていたからである。小説選はこの点を考慮して、1910年代を出発点とした。」（日本語訳は筆者による。なお韓国語の「ウリ」を一律に「われわれ」と訳したため、多少意味が取りにくいかもしれない。場合に応じて「韓国」「朝鮮」「わが民族」等と適宜読み替えて頂きたい）。

この「刊行辞」は、それ自体としては文学における「近代性」「現代性」の規定あるいは基準については述べていないが、①小説のジャンルでの「現代」の始発点に触れ、②小説文学の特徴は短編小説に典型的に顕れる、としたうえで、③その現代的短編小説について、「1910年代＝出発」「1920年代＝成立」「1930年代＝完成」という見解を示している。

小説というジャンルが文学を代表出来るかについては、それ自体別の検討が必要であろうが（特に韓国の場合、今日においても、多くの読者を有するという意味での「大衆文学」の世界を含めて、〈詩〉文学が日本とは比較にならないほど大きな比重を占めていることに注意しておくべきであろう）、少なくとも近現代においては小説文学を以って文学の時代性を考察できるという前提に立てば、この「刊行辞」の語内容は本稿の問題意識に即して次の様に読み替えることが可能であろう。即ち、小説（特に短編小説）に代表される「韓国現代文学」は、いわゆる〈開化期〉にではなく、植民地時代の初期である1910年代にスタートし、三一独立運動（1919年）を経た1920年代の「戦間期」に成立し、大恐慌後、日本帝国主義の中国侵略が本格

化して植民地朝鮮が「兵站基地」化して行った1930年代に完成したということである。

1930年代の「完成」を言うためには、当然その時期に登場して日本の敗戦後の「解放空間」で重要な意味を持つことになる〈朝鮮プロレタリア文学〉がある評価の基準になっている可能性があるが、「刊行辞」では特別にその点に触れていない。

何れにせよ、ここでは文学の「近代性」について本稿がさきに示した内容とはかなり異質な基準で、その「現代性」が語られている。(積極的に「現代性」を語っているわけではないが、『韓国現代代表小説選』の「刊行辞」である以上、この様に解釈するのが自然であろう。)

筆者がここで感じる一種の違和感については後で述べることにして、ここではまず上記の様な認識で編集された『小説選』の中身を具体的に検討しながら、韓国文学の「現代性」に関しての『小説選』の認識の把握に努めたい。

『韓国現代代表小説選』は、一冊の分量が、各巻の巻末に付けられた(現在一般に使用されていない)言葉の意味の説明を含めて450ページから490ページとかなり大部ではあるが、しかしこの程度の『小説選』で、(短編に限定したとしても)「韓国現代小説」の全貌を窺うのは無理であろう。とは言え、ここにどの様な作品が収録されているかを見ることによって、この『小説選』の編集方針と、そこに顕れている「文学の現代性」を判断する材料にすることは可能だと考えられる。

全作品名を紹介すると紙数だけを増やすことになりそうであるから、各巻の作品の作家名とその生年および没年、解放後〈北〉に行った「越北」、逆に〈北〉から〈南〉に来た「越南」などの特別の事情に関してのみ次に紹介してお

こう。(作家名の後の括弧内の数字は、その作家の作品で『小説選』に収録されたものの数を示す。なお、韓国では自分の意志で〈北〉へ行ったことを「越北」、強制的に拉致されて〈北〉へ行ったことを「拉北」と言うが、必ずしも個々のケースについて正確な情報に基づいて判断されてはいない場合がある様に思われる。本稿では取り敢えず『小説選』の作家年譜に記されているところに従って示しておく。)

第1巻 申采浩(1) 1880年生 1936年獄死  
太華山人(本名は崔瓚植または崔永年)

(1) 生年・没年不詳

李光洙(2) 1892年生 1950年「拉北」、死亡

梁建植(2) 1889年生 1944年死亡

玄相允(1) 1893年生 1950年「拉北」

羅薫錫(1) 1896年生 1946年死亡

金東仁(2) 1900年生 1951年死亡

廉想渉(4) 1897年生 1963年死亡

玄鎮健(4) 1900年生 1943年死亡

羅稻香(3) 1902年生 1927年死亡

第2巻 崔曙海(3) 1901年生 1932年死亡

李益相(1) 1895年生 1935年死亡

李箕永(3) 1895年生 1984年死亡

(解放後は〈北〉で作家活動)

趙明熙(2) 1894年生 1938年銃殺される

韓雪野(3) 1901年生 「越北」  
1962年肅清される

宋 影(2) 1903年生 「越北」  
1979年死亡

第3巻 蔡萬植(4) 1902年生 1950年死亡

李泰俊(5) 1904年生 「越北」

1955年肅清される

- 朴泰遠（3） 1909年生 「越北」  
1986年死亡
- 金裕貞（4） 1908年生 1937年死亡
- 安懷南（2） 1909年生 1947年「越北」
- 第4巻 李無影（1） 1908年生 1960年死亡  
朴榮濬（1） 1911年生 1976年死亡  
（1938年より「満州」で作家活動）  
金南天（3） 1911年生 「越北」  
1953年肅清される  
姜敬愛（2） 1907年生 1944年死亡  
李北鳴（2） 1908年生 （解放後  
〈北〉で作家活動）  
朴勝極（1） 1909年生 1946年「越北」  
朴花城（1） 1904年生 1988年死亡  
李孝石（2） 1907年生 1942年死亡  
兪鎮午（2） 1906年生 1987年死亡  
嚴興燮（1） 1906年生 1950年「越北」  
白信愛（2） 1908年生 1939年死亡
- 第5巻 李 箱（2） 1910年生 1937年死亡  
崔明翊（2） 1903年生 （解放後  
〈北〉で作家活動）  
兪恒林（1） 1914年生 1980年死亡  
（解放後〈北〉で作家活動）  
金東里（4） 1913年生 1995年死亡  
安壽吉（2） 1911年生 1977年死亡  
黄順元（4） 1915年生 「越南」  
鄭飛石（1） 1911年生 1991年死亡  
桂鎔默（2） 1904年生 1961年死亡  
朴魯甲（1） 1907年生  
玄卿駿（1） 1909年生 1950年死亡  
（解放後〈北〉で作家活動）
- 第6巻 金廷漢（4） 1908年生  
金史良（1） 1914年生 1950年死亡
- （解放後、〈北〉で作家活動。中国の朝鮮義勇軍に加わって朝鮮戦争に参戦）
- 玄 徳（1） 1909年生 「越北」  
崔貞熙（1） 1912年生 1990年死亡  
李根榮（1） 1910年生 「越北」  
許 俊（2） 1910年生 「越北」  
李善熙（1） 1911年生 「越北」  
林玉仁（1） 1915年生 「越南」
- 第7巻 李鳳九（1） 1916年生 1983年死亡  
崔泰應（1） 1917年生 「越南」  
朴淵禧（1） 1918年生  
金永錫（1） 生没年不明 「越南」  
金永壽（1） 1911年生 1977年死亡  
金學鐵（2） 1916年生 （青年期に中国に脱出して抗日独立闘争に参加。解放後〈南〉で作家生活のうち「越北」。さらに中国に亡命して中国で作家活動。“大躍進期”と“文化大革命”期に獄中生活）  
朴賛謨（1） 生没年不明  
李東珪（1） 1911年生 「越北」  
1952年死亡  
全洪俊（1） 生没年不明  
池河連（1） 1912年生 「越北」  
1960年死亡  
柳周鉉（1） 1921年生 1982年死亡  
鄭漢淑（1） 1922年生  
崔仁旭（1） 1920年生 1972年死亡  
孫素熙（1） 1917年生 1987年死亡  
金利錫（2） 1914年生 1964年死亡  
金光洲（1） 1910年生 1973年死亡  
康信哉（1） 1924年生  
吳永壽（3） 1914年生 1979年死亡
- 第8巻 張龍鶴（1） 1921年生 「越南」  
郭鶴松（1） 1927年生 1992年死亡

	宋炳洙（2）	1932年生	
	呉尚源（2）	1930年生	1985年死亡
	金聲翰（2）	1919年生	
	朴景利（2）	1926年生	
	朴敬洙（1）	1930年生	
	徐基源（2）	1930年生	
	鮮于燁（2）	1922年生	1986年死亡
	孫昌渉（3）	1922年生	1973年に日 本に帰化
第9巻	李範宣（3）	1920年生	1982年死亡
	李浩哲（4）	1932年生	「越南」
	金光鏞（2）	1919年生	1988年死亡
	呉有權（1）	1928年生	
	秋 湜（1）	1920年生	
	崔一南（2）	1932年生	
	河瑾燦（4）	1931年生	
	韓戌淑（1）	1918年生	
	韓末淑（1）	1931年生	
	金光植（1）	1921年生	
	金東立（1）	1928年生	

以上、この『小説選』には合計89名の作家の164篇の短編小説が収録されている。その世代別数や経歴の特徴（第6巻の金学鉄以外は、全て『小説選』の作家略歴による。金学鉄については、それ以外に、中国が開放政策に転換した後ソウルであらためて出版された自伝的長編『激情時代』『20世紀の神話』や、その解説などによる）を検討することによって、ここで「韓国文学の現代性」がどのように認識されているかを、考察してみよう。（もっとも、筆者の韓国文学の作品自体に関する知識は極めて貧弱であることを、率直に認めなければならない。今回通読したこの『小説選』に収録された164篇の作品の中で、以前に読んだことのあったものは僅か11篇〔日本語訳で読んだ金東里の「巫女図」

を含む〕に過ぎなかった。「文学作品の大海」のなかで、どのような基準で収録作品が選定されたのかを考えるのは、筆者にとって取り敢えず不可能である。筆者の韓国文学への関心が殆ど専ら最近年のそれに集中して来たこととも関連してはいるが、本稿の考察はその意味でも限定的な内容のものであることを、ことわっておきたい。）

検討の前提になるのは、『小説選』に収録された作品の全てが「韓国文学」（解放後、〈南〉に成立した「大韓民国」の文学という意味ではなく、旧韓末から植民地時代の朝鮮全体と、分断後の〈南〉の文学に至る全体を指す。この用語法は、分断国家の一方にのみ国家としての正統性を認めるものだという誤解を招くかも知れないが、分断後、南北の文学交流がほぼ完全に遮断された現実から、やむを得ずこの様に表現した。従って、同様の基準によって解放後の〈北〉の文学までを包含する「朝鮮文学」の用語も成り立つ。本稿が躊躇いつつも「コリア文学」の表現を避けたのは、「コリア民族の文学全体」と誤解されないためである）に属するという認識であろう。この点については、大きな問題ではないが若干の注意が必要である。

さきに触れた金学鉄の様な中国朝鮮族文学の場合、それを「韓国文学」の範疇で理解するのは困難であろうし、それ以外にも『小説選』には少数ではあるが日本の地で日本語で発表された作品が収録されている。第4巻の李北鳴「窒素肥料工場」、第6巻の金史良「光のなかに」がそれである。前者は〈朝鮮プロレタリア文学〉の代表作の一つとされ、もともとは1932年に『朝鮮日報』に連載されたものが当局の検閲によって中断され、後に1935年になって日本の『文学評論』に「初陣」の題で日本語で発表されたものである。解放後「越北」した作者は、

1957年に〈北〉で完成版を発表する（以上、『小説選』に収録された同作品に付けられた註と、第4巻の解説・金在湧「プロ小説の拡大と同伴者作家の変貌」による）。後者は1940年に日本の『文芸首都』に日本語で発表されたもので、『小説選』は徐恩恵の翻訳で収録している。二人の作家の性格は（それぞれ数奇な運命をたどったという）共通面もあるが、思想的にも作品の形式でも基本的に異質であろう。しかし、この二つの作品については戦後の「在日朝鮮人文学の先駆け」と見るよりは、戦時期の韓国文学（この場合は朝鮮文学と言い換え得る）の範疇で理解するのが自然であろう。

本稿では便宜上、金学鉄の作品を含めて、『小説選』に収録された全ての作品を「韓国文学」として考察の対象にする。

『小説選』の作家一覧を示したところで窺われる極めて〈韓国的〉な特徴は、多数の「拉北」「越北」「越南」作家がここに含まれていることである。ここには世界的に見てもおそらく特異な韓国近現代史の現実が顕れており、「コリア文学」の全体を「韓国文学」の範疇で理解することの困難さを端的に示しているが、『小説選』の編集方針が、軍事政権時代には李光洙など少数の例外は別にして不可能に近かった「越北」作家の作品を積極的に収録することで、分断に由来する解放後の「韓国文学」の〈断絶〉の持つ意味を、リアルに示そうとするところにあったことが、反映している面もあるかも知れない。

ともあれ、『小説選』の作家89名の中には、「拉北作家」2名・「越北作家」16名（金学鉄はここに含める）・「越南作家」6名と、それ以外に、解放後〈北〉で活動した作家6名と、解放後南北以外の外国で作家活動をした1名（金史良をここに分類した）がいる。合わせて31名

（34.8%）が、分断による韓国（朝鮮）文学の〈断絶〉を身をもって直接体験した作家であるわけである。

この間、〈南〉の地で「拉北作家」「越北作家」の作品に触れる機会が遮断され続けて来たわけではない。韓雪野『黄昏』や李箕永『豆満江』などの長編や林和の詩集などを含め、「越北作家作品集」の類の書物は、1980年代半ば以降、韓国で新たに出版され、多くの読者を得て来た（但し李箕永は「拉北」「越北」ではなく、解放後もひき続き〈北〉の地で作家活動を続けた例である）。かつて〈南〉で忌避されていた、1920年代から1930年代後半にかけて書かれた洪命熹の大河歴史小説『林巨正（イム・コッチョン）』などは、新たに厳密な校訂を経た全10巻がロングセラーになり、更に一部内容を変えてTVドラマ化されて放映された。それだけではない。『血の海』や『花売の乙女』など、北朝鮮文学の代表作の一部も韓国で出版されたことがある（但しこの場合には公安当局による厳しい規制の対象になった）。本稿で述べて来た、分断による韓国文学（朝鮮文学）の〈断絶〉は、南北文学の自由な交流、敢えて言えば統一の実現によって克服され得る問題であろうが、そこに向かう努力が既に〈南〉の地では開始されていると言うことが出来る。

そのことを前提に、この『小説選』に多数の「拉北」「越北」「越南」作家の作品が含まれていることの意味を考えると、単なる「分断意識の克服」を訴えるという目的ではなくて、〈断絶〉を厳しく認識しながらも、分断によって南北双方の文学が継承すべき同一の歴史の共有が不可能になったことの非正常さ、強要された歴史認識の歪曲について、自然な形で語ろうとする姿勢が、ここに窺えるのではないだろうか。この〈断絶〉こそが、韓国近現代文学の最

も重要な特色であると言い得るかも知れないからである。

とはいえ、『小説選』がこの〈断絶〉を文学の「現代性」の基準にしているのではないことも、明らかである。もしそうなら、抗日闘争における左右の対立が顕在化する1930年代以降、或いは1945年の解放以後に「現代文学の始点」を設定すべきであったであろうからである。

以下、本稿では節をあらためて、収録された作家の世代や作品の発表時期などから、『小説選』における文学の「現代性」にかかわる認識について、引き続き検討して行きたい。

#### IV. 『韓国現代代表小説選』に収録された作家と作品の時代性

『小説選』にその作品が収録されている作家のうち、最も生年の早いのは1880年生まれの中采浩で、生没年不明のうち初期に属する太華山人を除けば、1880年代生まれは、1889年生まれの梁建植と二人である。逆に生年の最も遅いのは、何れも1932年生まれの宋炳洙・李浩哲・崔一南の三人である。

収録作品の中で最も早く発表されたのは、中采浩「龍と龍の大激戦」(『毎日申報』1912.3.1)であり、最も近年のものは、金学鉄「無名小卒」(『創作と批評』1989年秋号)である。このうち後者は、さきにも紹介した著名な中国朝鮮族作家としての作者の「文化大革命」期の体験を綴ったもので、1989年になって韓国で紹介されたものである(同年、プルピッ社から刊行された金学鉄の短編集『無名小卒』にも収録されている)。それを別にすれば、李浩哲「門」(『創作と批評』1976年春号)と呉永壽「珊瑚の吸い口」(『創作と批評』1976年春号)が一番新しい作品である。

これらを含め、『小説選』の作家の生年と作

品の発表時期を、5年単位で時期区分してその数を示せば、次の通りである。

	生年別作家数	発表時期別作品数
1880年～1884年	1	
1885年～1889年	1	
1890年～1894年	3	
1895年～1899年	4	
1900年～1904年	11	
1905年～1909年	15	
1910年～1914年	18	1
1915年～1919年	10	5
1920年～1924年	10	7
1925年～1929年	4	14
1930年～1934年	8	11
1935年～1939年		34
1940年～1944年		11
1945年～1949年		22
1950年～1954年		10
1955年～1959年		27
1960年～1964年		8
1965年～1969年		4
1970年～1974年		4
1975年～1979年		2
1980年以後		1
不明(計)	4 (89)	(164)

作家のうち64名(生年不明を除く75%)が1900年から1924年に生れた人々で占められており、作品のうち129篇(79%)が1925年から1959年の間に発表されたもので占められている。作家は全て旧韓末から日帝植民地時代に生まれた人々で、作品のうち83篇(51%)は解放前に発表された作品、残りの81篇は解放後の作品である(解放の年、1945年に発表された李東珪の「お兄ちゃんの恋人」が収録されているが、『新建

設』45年12月号に掲載された作品で、内容も〈解放空間〉を生きる労働運動家の葛藤と対立をテーマにしており、解放後の「左翼文学」の先駆けをなす様な作品である)。

つまり、『小説選』の中心は、ほぼ旧韓末から植民地時代の前半期に生れた作家たちによって、植民地時代の後半期と、解放から1950年代に発表された作品によって成り立っており、それを前後する時期の作品は、中心を占める上述の時期の文学の特質を理解するうえで是非参照されるべきだと考えられた作品が、選ばれたように見える。「韓国文学」の範疇に含めることの可否が問題と成り得る金学鉄の作品を取って収録したのも、こうした理由によるのであろう。

既に見た様に、『小説選』の編集者は、「韓国現代文学」について、「1910年代＝出発」「1920年代＝成立」「1930年代＝完成」という認識を示していた。編集の方針はほぼこの認識に沿ったものと理解することが出来るが、この場合、解放から1950年代の作品に植民地時代後半期と同様の比重を置いているのは、何故であろうか。例えば1930年代の〈朝鮮プロレタリア文学〉の継承性という点から見れば、解放後も1948年の大韓民国成立までは、或いはもう少し広く見て1950年6月の朝鮮戦争(「6.25動乱」)勃発までは、〈南〉の地においては、その流れがそれなりの地位を確保していたのは事実である。さきに例として挙げた解放直後の作品、李東珪「お兄ちゃんの恋人」(1945.12)を始めとして、金永錫「電車運転手」(1946.8、第7巻)・池河連「道程 小市民」(1946.7、第7巻)などはこの系列の代表作であろうが、「プロレタリア文学」とは別にも解放空間での左右の理念的対立と葛藤、日本帝国主義から解放された韓国に「占領軍」として進駐した米軍と軍政当局と韓国民衆の矛盾が、しばしば短編小説の格好の題材になっ

ていた。金永壽「血脈」(1946.7、第7巻)・朴賛謨「夢みる村」(1947.2、第7巻)や、少し後の時期になるが、宋炳洙「ショーリー・キム」(1957.7、第8巻)などは、その代表的な例である。さらに強要された分断のもたらした人間的悲劇については、朝鮮戦争時に「越北」する作家たちの「越北」以前の作品が、「越南」した作家の場合は「越南」以後の作品が、しばしば臨場感に溢れる作品を発表したもの、主として解放空間から1950年代にかけてのことであった(後者の例として、黄順元「鶴」[1953.5、第5巻]・李浩哲「脱郷」[1955.7、第9巻]を挙げておこう)。

勿論、植民地時代末期から解放空間へ、さらに1950年代への文学の継承性は、ここに挙げた様な言わば多少なりと政治性を帯びた作家の作品についてのみ見られるのではない。解放後の文学論争において、文学が社会の現実に参加することを拒否する「純粋文学」の立場を主張することになる金東里のこの時期の作品(「驛馬」1948.1、「等身佛」1961.1、第5巻)に見られる、「恰も何事も無かったかの様な」自己反省を欠いた姿勢もまた、この『小説選』を通して読み取ることが出来る。

日本の文学界において、第二次世界大戦での敗戦後に、かつてアジアへの侵略思想を鼓吹し、「大東亜共栄圏」を美化して来た作家たちが、全体としては〈回心〉することなく戦後文学の主流を形成した様に(彼らに対抗した、雑誌『近代文学』に結集した人々の高い志を過小評価するのではない)、韓国においても、「皇国臣民化」を謳い青年たちに「天皇陛下の赤子として銃を取ることを」を説き続けた一群の「親日文学者」たちの多くは、解放後その行為を「やむを得ない(朝鮮人のための)親日行為であった」と自己合理化に努め、保守的「愛国者」に変身

して作家活動を続けたのであった（林鍾国『親日派』、コリア研究所訳、御茶ノ水書房、1992年、参照）。深い自己反省の姿勢を示した崔南善とは対照的に、「反民族行為」が「善意」に出るものであったと強弁し、今度は臆面もなく独立運動家の伝記『島山 安昌浩』を執筆した李光洙に、その典型例を見ることが出来る。（「親日文学者」としての李光洙の思想の変遷と屈折については、別に本格的な検討の機会を得たい。彼の最も著名な作品『土（フク）』において、既に「愛国」は「大日本帝国」を対象とするものになっており、植民地時代末期の作品『有情』や、後半部が解放後に書かれた『愛（サラン）』においては、植民地支配自体が視野に入っていない。その段階ではなお「朝鮮人としての自覚と向上」を説いていた『民族改造論』の彼は、多分深刻な内面的葛藤なしに「自然の流れのままに」「親日派」に転身し、それだからこそ逆に自己合理化も容易く可能だったのではないだろうか。その反面で、「革命家の妻」に見る様に、李光洙の左翼思想に対する反発と軽蔑は一貫していたようである。）

この意味でも、「1930年代に確立」した韓国現代文学は解放後から1950年代の文学に継承されていると、『小説選』の編集者は認識していると、見ることが出来る。

とは言え、『小説選』にそれなりの比重を占めて収録されている1960年代や1970年代の文学作品について、1950年代までと同じ基準でその「現代性」が認識されているのではないことも、明らかである。およそある時代を「現代」と規定する限り、その時期よりも時間的に現在に近い時代は須らく「現代」に含まれるとするほかないであろう。「現代」よりも新しい時代区分を可能にする言葉自体が、そもそも存在しない

からである。

しかし、『小説選』が1960年代の作品を12篇、1970年代の作品を6篇収録しながら、最後の作品を1976年の作品（いずれも前出の呉永壽「珊瑚の吸い口」と李浩哲「門」。この2篇は『創作と批評』1976年春号に同時に掲載されたものである）にして、1977年以降、1980年代・1990年代の作品は収録していないこと（さきに紹介した金学鉄の「無名小卒」は例外）は、「現代文学」に関するある認識を反映していると考えられる。

〈同時代文学〉の持つ歴史性を評価するのは容易な作業ではないから、この『小説選』の様な企画においては、ある時点を区切って編集するのは当然のことであり、だからと言ってそれ以後の文学を「現代文学」ではないと考えるのではないことは、自明の前提である。敢えて言えば「現代文学」の枠の中に〈同時代文学〉という小範疇を設定して、その歴史性の検討は、いまま少しの時間の経過を待って試みようということなのかも知れない。ここで考えてみたいのは、何故『小説選』にはかなりの数の1960年代・1970年代の作品が収録されたのか、換言すればその時代の文学の「現代性」がどの様に認識されているのかという点についてであり、更には1976年を区切りにした理由は何であったろうかという点についてである。

これらの作品の中には、1950年代までに既に地位を確立していた作家が1960年代に入ってから発表したものも含まれており、この場合には文学の「現代性」を深刻に問う必要は必ずしもないであろう。金東里「等身佛」（1961.11、前出）・金廷漢「河原の話」（分断の悲劇を負う、ある純朴な少年の貧しい家庭と、その担任教師の心の交流を描く。1966.10、第6巻）・同「修羅道」（1969.6、第6巻）・呉永壽「後日談」

(済州島の「4.3事態」の悲劇をテーマにした作品。1960.6、第7巻)・同「珊瑚の吹き口」(1976年春、第7巻)・徐基源「馬鹿列傳3」(1971年秋、第8巻)・金光鏞「キャピタン・リ」(1962.7、第9巻)・河瑾燦「王陵と駐屯軍」(1963、第9巻)等、大部分はこの系列に属する作品である。この場合には、主題の設定においても物語性においても、解放空間および1950年代の文学を継承していると見ることが出来るのではないと思われる。

1960年代以後の作品で、この範疇に入れなかったのは、康信哉「若い樺」(1960.1、第7巻)・宋炯洙「あの巨大な抱擁の中へ」(1972.4、第8巻)・朴景利「愛の島のおばあさん」(1966年、第8巻)・李浩哲「副市長、赴任地に行かず」(1965.1、第9巻)・同「大きな山」(1970.7、第9巻)・同「門」(1976年春、第9巻)・呉有權「貧しい兄弟」(1963.7、第9巻)・崔一南「驪馬二匹」(1974.4、第9巻)・河瑾燦「三角の家」(1966.1、第9巻)・同「鮪」(1970.1、第9巻)の10篇である。

このうち、「若い樺」は、経済的にゆとりのある家庭の一人の若い娘の生活の不安感と倒錯意識を描いており、〈四月革命〉以前に既にこのテーマで小説が発表されていたことに、むしろ驚きを覚える。その後の韓国は経済成長のなかで豊かな〈都市中産層〉が形成されて行って、1980年代ともなると「物質的な豊かさの中での不安」が大衆小説を含めた文学の主要テーマの一つとして定着するが(階層間格差の厳存と拡大の現実のなかで、それはしばしば民衆に虚偽意識を持たせる役割を果たした)、この作品は当時出現した新しい傾向を代表するものとして、『小説選』に収録されたのかも知れない。逆に経済成長から取り残された貧しい階層の人々の生活と意識を、時には諧謔性を加えて描いたの

が、「愛の島のおばあさん」「貧しい兄弟」「大きな山」「驪馬二匹」「三角の家」などの作品である。1970年代に登場する黄哲暎や1980年代の李東哲のテーマが、先取りされていたような印象を受ける。

一方、「門」「副市長、赴任地に行かず」「鮪」は、軍事独裁政権の民衆支配の残虐性を極めて深刻に描いたり、或いは支配される民衆の側の意識を喜劇的に描写したものである。さらに「あの巨大な抱擁の中で」はベトナム戦争に参加した韓国軍将兵の話で、これらはいずれも(私の規定する)「韓国現代史」を直接正面から扱った作品と見ることが出来る。

以上の事実から、『小説選』が1960年代以降の韓国文学の「現代性」をどの様に認識しているのかについて、ほぼ次の様に理解することが出来るであろう。

すなわち、解放空間から1950年代のテーマ、端的に言って分断に由来する肉親や恋人・友人との別れ、南北それぞれの体制への不満と生活の不安、イデオロギー的対立と葛藤という主題は、1960年代の〈南〉においても文学作品の主要な主題であり続けたから、その意味でのそれ以前の文学からの継承性が確認出来るということが、その一つである。しかし、その場合に忘れてはならないのは、「平和統一」を唱えた進歩党党首曹奉岩が「反共法」で裁かれて処刑されるという李承晩政権末期から、一年で終息した四月革命空間に続く朴正熙軍事独裁政権の時代には、〈反共〉の中身が解放から朝鮮戦争にかけての時代のそれとは、かなり根本的に変化していたという事実である。独立闘争の時代には、対立しつつも(新幹会運動に代表される様に)時には連帯して日本帝国主義と闘った左右の勢力は、少なくともお互いの存在を認識し、その主張するところを理解しながら、論争して

いたし、解放直後の南北でも、多少なりとその雰囲気は残っていた。しかし朝鮮戦争を経た後の〈南〉においては、そして事情は大いに異なるとは言え〈北〉においてもおそらく、左右は相互の存在を抹殺したところに立脚することになり、その意味では「左右」ですらなくなったと言わなければならない。

勿論、植民地時代思想闘争や、解放直後の時期の左右の路線論争（当然、文学のあり方をめぐる論争はその重要な一部分であった）を記憶する世代が、〈南〉の社会から消滅したわけではなかった。もと「左翼陣営」に属した人々の少なからぬ部分が「越北」したり、権力の犠牲になったりはしたが、〈南〉の社会にとどまってその知的営為を続けた人々も確かに存在していた。在野の経済学者・朴玄採などは、その典型的な例である（朴玄採の経済学については、拙著『韓国民族主義論序説』影書房、1984年、および拙稿「民族経済論の理論体系」、前掲拙著『歴史としての国民経済』所収、参照）。

しかし、彼らにはもはや、自由に自己の思考や思想を展開する条件が与えられていなかった。彼らは沈黙するか、ヨーロッパや日本の非「左翼」思想家の思想や思考に依拠する体裁を採って、自己の思想を婉曲に表現するのが精一杯であった（その態度ですら、「仮装した共産主義」と見なされて、しばしば「思想犯」となる原因をつくった）。そのことが、結果的に〈南〉の人文社会科学に〈市民社会〉的発想を定着させた面があるとすればそれこそ歴史のパラドックスと言えようが（拙稿「韓国資本主義論争と民族経済論」、拙著『韓国の経済発展と社会構造』御茶の水書房、1992年、所収、参照）、何れにせよ、その様な社会的雰囲気の中なかでは、「左右」の理論闘争や対話すら、あり得なかった。

文学の分野においては、このことは取り敢え

ずかつての「朝鮮プロレタリア文学」との継承性の完全な消滅を意味したと、考えられる。解放空間から朝鮮戦争後の「越南」作家が、比較的自由に自己の思想を表現出来た時代は、過去のものとなった。彼ら「既成世代」の作家の沈黙と晦渋の一方で、1960年代以後急速に進行する産業化に伴う新しい問題が、新しい層の作家たちによって、新しい手法で、文学の主題になって来るが、伝統的マルクス主義理論に依拠することが物理的に不可能な条件のもとで、そこでは市民社会指向性と〈民衆〉指向性が、一見奇妙に融合する様な状況が生れた様に思われる。人文社会科学の各分野と同様に、文学の世界でも〈民主化〉と〈ポピュリズム〉が同時に追求される時代が到来した（1970年代の金芝河文学にその例を見るのは、不当であろうか）。『小説選』が1960年代から1970年代の韓国文学についてその「現代性」の内容と考えているのは、こうした歴史認識に規定されたものと見られるのである。

本稿の問題意識からすれば、この「現代性」が1980年代以降に受けた試練を、深刻に考えた。すでに度々論じた点であるのでここでは繰り返さないが（拙稿「『変革の思想』と『思想の変革』」、前掲拙著『韓国の経済発展と社会構造』所収、その他）、1980年代中葉以降の〈韓国資本主義論争〉の過程で明らかになったことは、禁忌を（半ば）解かれた古典的マルクス主義理論が、初めてそれに接した若い世代の理論家たちによって極めて新鮮なものとして受け止められて、韓国社会の構造分析に活用される一方、1970年代までの民主化闘争の過程でしばしば有力な武器として活用されて来た〈民族経済論〉などは、彼らによって「階級性という基本視点を軽視した妥協的ブルジョア理論」とし

て批判されることにもなったのであった。（〈民族経済論〉の主唱者である朴玄採の朝鮮戦争前後の立場からすれば、これは歴史の皮肉としか言えない事実ではなかったであろうか。）

文学についても、似た様な事態が進行した。1970年代の〈民族文学〉論の限界を克服しようと主張する1980年代の〈民衆文学〉には、その全てがそうであったと言うのではないが、「朝鮮プロレタリア文学」との真剣な思想的格闘を経ているだけに、リアリズムを欠いた古典的階級観をもとにした階級意識鼓吹にとどまった作品が存在したのである。

この問題は、『小説選』ではどの様に認識されているのであろうか。少なくとも明示的な解答はここにはない。『小説選』の編者たちに対する敬意と感謝をあらためてあらわしたうえで、1980年代以降の事態も含めて「韓国文学の現代性」をどう認識するかについて、次に筆者自身の考えを記しておきたい。

ただ、ここではいきなり結論を述べるのではなく、その準備作業の一つとして、『小説選』に収録された作品の、発表当時の掲載誌紙を時代別に見ることで、この間の文学の継承性とも言うべき点について、確認しておこう。

## V. 近代文学の継承性と文学の「現代性」

『韓国現代代表小説選』に収録された作品が、当初発表された掲載誌紙について、おおまかな時代別に示すと、次の通りである（作品によっては、一旦発表された後に改作されて別の雑誌に掲載されたり、連載の中断後、別の雑誌で再開されたケース等があるが、ここでは、多少無理はあるが『小説選』が作品の後に記録している、テキストとした掲載誌紙を初出誌と見なす。

なお一部の誌紙名は音訳）。

時期区分	掲載誌紙名	作品数
1912年～1920年	『毎日申報』	1
	『新世界』	1
	『仏教振興会月報』	1
	『半島時論』	1
	『青春』	1
	『女子界』	1
1921年～1945年 8月	『文章』	14
	『朝鮮日報』	9
	『朝光』	9
	『朝鮮文壇』	6
	『開闢』	4
	『東光』	2
	『朝鮮之光』	2
	『東亜日報』	2
	『中央』	2
	『新家庭』	2
	『朝鮮文学』	2
	『春秋』	2
	『白鳥』	1
	『黎明』	1
	『新民』	1
	『生長』	1
	『文芸運動』	1
	『現代評論』	1
	『野談』	1
	『文芸時代』	1
	『三千里文学』	1
	『朝鮮中央日報』	1
	『女性』	1
	『第一線』	1
	『人文評論』	1
	『文学評論』（日本）	1

	『新人文』	1	1920年代以前の掲載誌紙で、それ以後に登場するものが無いところから見て、植民地支配の初期の〈武断統治〉時代の文学がおかれていた状況を逆に推察することが出来る様に思われるが、三一運動以後には、〈文化統治〉のもとで誕生したハングルの新聞『東亜日報』『朝鮮日報』などの「民族紙」をはじめとして、多数の文芸・思想雑誌が登場し、その中には解放後にも継続するものがあったことを、先ず知ることが出来る。(植民地支配下と1970年代の言論闘争時と御用新聞的色彩が顕著な現在の『朝鮮日報』を、「継続性」において理解するのはどうかという意見はあり得るが、商業新聞・総合雑誌とは本来そのような変身を特性としているものであろう。「嶋中事件」以前から今日への『中央公論』の変身しかりである。それでもなお、誌紙自体の継続は、文学や言論の継続性の一応の基準にはなるものと思われる。) 雑誌名を変えて継続したものが他にもあるかも知れないが、植民地時代から1950年代まで継続して掲載作品が『小説選』に収録された誌紙として、『東亜日報』『文章』『開闢』を確認することが出来る。
	『新女性』	1	
	『断層』	1	
	『文芸首都』(日本)	1	
1945年8月～1959年	『現代文学』	10	さらに、解放から1950年代の作品の掲載誌紙で、1960年代以後にも確認することが出来るのは、『現代文学』『思想界』『文学』である。1950年代から〈反独裁・民主化〉の論陣を張った『思想界』の存在に、ここでは特に注目しておきたい。同誌がなお限界として持っていたと言われる、(その限りで当時の支配イデオロギーとも矛盾しない、歪曲されたそれとしての)徹底した「反共主義」を分水嶺として、1960年代に登場する『文学と知性』と『創作と批評』が両翼として位置する、1970年代から1980年代の文学論争の構図が成立するのは、周知の所であらう。(両誌は何れも、「維新時代」から全斗煥
	『文芸』	5	
	『新天地』	4	
	『文学』	4	
	『白民』	4	
	『思想界』	4	
	『文学芸術』	3	
	『解放文学選集』	2	
	『自由世界』	2	
	『韓国日報』	2	
	『文章』	1	
	『火(ブル)』	1	
	『開闢』	1	
	『東亜日報』	1	
	『ソウル新聞』	1	
	『自由文学』	1	
	『新文学』	1	
	『大潮』	1	
	『新朝鮮』	1	
	『新建設』	1	
	単行本	1	
1960年代以後	『思想界』	5	
	『創作と批評』	3	
	『月刊文学』	2	
	『現代文学』	2	
	『月刊中央』	1	
	『文学』	1	
	『文学と知性』	1	
	『現代韓国文学全集』	1	

政権時代に繰り返し厳しい言論弾圧の対象になった。「民主化」指向という点では共通するところがあったことを、強調しておきたい。両者の性格を対比して「韓国文学の傾向」を論ずることの好きな日本の批評家たちが、しばしばこの点についてあまりにも無感覚である様に見えるので、敢えて指摘しておく。）

さて、以上本稿では、『現代韓国代表小説選』が「韓国文学の現代性」について如何なる基準でどの様に考えているかを、収録作品の時代性を中心に、かなり詳細に検討して来た。しかし、本稿の考察が導く結論は、韓国文学の「時代区分」としての〈現代文学〉を設定しようとする限り、『小説選』とは異なってやはり1960年代初めにスタート時点を求めるべきではないかということである。

本稿の第一節で述べた様に、筆者は「韓国現代史」のスタートを1960年代に設定したいと考えているが、結果的に、「現代文学」のスタート時点と一致することになる。しかし、強引に一致させるのではなく、それ以降の文学が植民地時代・解放空間・朝鮮戦争の戦中戦後の時期のそれから区別される、明らかに新しい段階を画していると見られるからであり、そのことは、『小説選』に収録された作品についての以上の検討からも確認出来たと考えるからである。硬直し、歪曲された「反共主義」がひろく国民意識として固着化する軍事政権の下で、「祖国近代化」のスローガンを掲げた工業化（産業化）政策が推進され、急速な経済成長の時代が到来した。経済成長の結果としての社会変動により、韓国社会の階級構造や身分制意識も大きく変化し、新しく発生した社会問題と社会意識は、文学の世界に新しい対象となって登場することになった。韓国文学の〈継続性〉とともに、この

「現代史」に固有の対象を文学作品のなかに表現しようとする「現代文学」が成立すると考えたいのである。1970年代の「民族文学」、1980年代の「民衆文学」も、この文脈において理解したいと、筆者は考える。

硬直した反共イデオロギーの克服、軍事独裁政権の民衆支配の非人間性に対する告発、アメリカや日本など「外勢」批判、民主主義の実現、〈原生的労働関係〉のもとでの労働基本権の確立、〈市民社会〉の主体としての自立した人格の形成、分断を克服する統一への願いと展望、などが文学のテーマとなり、このような〈社会性〉を軽視する作家たちの場合は、「産業社会の虚無性」「豊かな社会での精神的苦悩」「性の解放と限界」「シャーマニズムと産業社会」「家族の愛と葛藤」などを題材にした作品が次々と発表される。

この時期に「現代文学」を設定してこそ、軍事政権の残滓の清算、「漢江の奇蹟」の挫折と再建、南北対話の推進などを課題とする今日を、〈歴史としての現代〉のなかに位置づけることが出来るのではなからうか。

『小説選』がそもそも韓国文学における「近代」と「現代」の区分に特に関心を示していないことからすれば、本稿の主張は、『小説選』の立場を批判しようとするのではなく、韓国現代社会を研究対象とする一人の社会科学徒が、それなりに韓国文学に接して来た過程で得た素朴な感想に過ぎない。文学と社会科学を最初から分離してしまうことなく、両者の間の緊張関係に絶えず関心を持ち続けることが、文学と社会科学の双方に有益であることこそ、1970年代以来の韓国の〈民族文学論〉と〈民族経済論〉から、筆者が学んで来たことであった。本稿の試論に対し、韓国文学を専攻する研究者、とり

わけ韓国の〈民族文学論〉の立場の方々から厳  
しい批評と批判が寄せられることを、切に期待  
したい。

(1997年12月10日稿了)